

<研究ノート>

福祉系大学生のキャリア意識に関する調査研究（第2報）

田仲由佳¹⁾，河西正博¹⁾，吉森恵¹⁾，梅谷進康¹⁾，中山忠彦¹⁾，和田典子²⁾

A study on career consciousness in welfare university students.

Yuka TANAKA¹⁾，Masahiro KAWANISHI¹⁾，Megumi YOSHIMORI¹⁾，
Nobuyasu UMETANI¹⁾，Tadahiko NAKAYAMA¹⁾，Noriko WADA²⁾

The present study aimed to investigate differences in the effects of educational programs for career development on scores of career consciousness between spring and fall terms and between current and last years. For this purpose, we replicated Kawanishi et al.'s questionnaire survey (2012) on the career consciousness such as interest in seeking employment, degree of autonomy regarding employment seeking, and future prospects and plans, at the end of the educational program in the Career Practice class, using 75 students. The following results were obtained. Of three factors the scores of autonomy were highest and those of future prospects and plans were lowest. This result is assumed to be reflected in participant's developmental task. There were no significant differences in any of the items between Kawanishi et al.'s and our surveys. A qualitative research on the change of career consciousness is further required.

Key words：キャリア意識，キャリア教育，キャリアレディネス
career consciousness, career education, career readiness

1．問題・目的

近年、若者の就業に関わる社会状況は日々変化している。厚生労働省による大学生の社会的自立・職業的自立に関する調査¹⁾では、平成24年3月に大学を卒業した学生の就職率は93.6%となっており、前年同期比で2.6ポイントの増加がみられたと報告されている。一方、若者を取り巻く就業問題として、失業率の高さ、早期離職問題、非正規雇用者の増加

などが指摘されており、大学卒業者においても、進路不決断・進路未決定の問題をはじめ多くの課題が存在する。これらの背景には、雇用状況そのものの厳しさに加え、多様な生き方が選択可能である現代において典型的な生き方のモデルを見出すことが困難となったこと、そのため学生自らが自分自身の将来像を模索し、具現化していかなければならなかったことなどが要因として挙げられる。

これらの課題を背景として、各発達段階に

1) 神戸医療福祉大学 (Kobe University of Welfare) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5
2) 近大姫路大学 (University of KinDAI Himeji)

応じたキャリア教育が求められており、卒業後にはその大多数が就労を目指す大学生に対するキャリア教育についても、その必要性が強く認識されるようになってきている。実際に、2011年にはキャリア教育を適正に位置づけること（キャリアガイダンス）が大学設置基準の1つに含まれるようになった（山本、2011）²⁾。

では、大学におけるキャリア教育にはどのようなことが求められているのであろうか。文部科学省（2012）³⁾によると、キャリア教育においては、職業観・就労観および職業に対する知識や技能の育成とともに、自己理解や職業選択における主体性など就労に向けてその前提ともなる基礎的能力を育成していくことが必要であると述べられている。さらにその内容は、単なる就職支援ではなく、各大学の教育目的に沿った形での実践として求められており、実際に各学部、学科等の特徴に応じたキャリア教育の在り方が模索され、それらの効果を検証する実証的研究も進められている。

森山（2007⁴⁾；2008⁵⁾）は、キャリア教育を「自分の人生を主体的に自分で選び、その結果を享受すること、結果の責任を担うという自覚を促すことであり、自己決定・自己責任の原則を再認識させることである」と定義し、これらの考えをもとにキャリアレディネス尺度を開発している。下位領域として「関心性」「自立性」「計画性」の3つを設け、項目を作成し、大学1年生から3年生のキャリア教育にあたる科目の受講生を対象とした調査から教育の効果測定を試みている。その結果、4月（授業開始前）から7月（授業終了時）にかけてキャリアレディネスの得点が上昇する傾向がみられたこと（森山、2008）⁵⁾、中でも大学1年生のキャリア意識の伸びが最も大きいこと（森山、2007）⁴⁾が示され、と

りわけ低学年からの教育的介入の有効性が指摘されている。

以上の森山（2007⁴⁾；2008⁵⁾）の知見をふまえ、河西・田仲・吉森・梅谷・中山・和田（2012）⁶⁾は、大学1年生に対するキャリア教育の導入にあたり、福祉系大学1年生の入学直後のキャリア意識を報告している（第1報）。そこでは、前述のキャリア意識の3領域（関心性、自立性、計画性）のうち、自立性の得点が最も高く、計画性の得点が最も低いという結果が得られている（自立性>関心性>計画性）。

本稿では、河西ら（2012）⁶⁾に続く第2報として、1年間のキャリア教育を経た学生に対する第2回目の調査を実施し、教育介入前と教育介入後のキャリア意識を比較することを通して大学1年間のキャリア意識の変化について検討することを目的とする。

2．研究方法

調査概要

K大学社会福祉学部の1年次の必修科目である「キャリア演習Ⅰ（前期）」および「キャリア演習Ⅱ（後期）」を履修しているHキャンパスの2012年度入学の学生（80名）を対象に質問紙調査を実施した。

本調査はK大学の1年生を対象とした調査研究の第2回目にあたり、調査内容は、2012年4月に実施された第1回目調査（以下「調査1」と記載；河西ら、2012）⁶⁾に準ずる。

カリキュラムの特徴

本調査対象学生のカリキュラムは、社会福祉士の受験資格をベースとして、さらに各専門分野に応じた資格取得を目指す構成となっている。特に1年生では学科・コースごとに、資格取得を念頭に置いた履修指導を行って

り、1年次より資格取得に関する科目も含まれている。

キャリア演習Ⅰおよびキャリア演習Ⅱの授業概要

キャリア演習Ⅰ（前期）およびキャリア演習Ⅱ（後期）の授業概要は以下の通りである。

まずキャリア演習Ⅰの到達目標を、①自分自身への理解を深めるための客観的な自己分析ができる、②他者と円滑なコミュニケーションを図ることができる、③自己PRができる、とした。次にキャリア演習Ⅱの到達目標については、①現代の大学生を取り巻く社会状況を理解することができる、②自分自身のキャリアや将来像について理解を深めることができる、とした。

これらの到達目標に基づき各学科・コースの授業で取り組みが行われた。表1に、その一部を記載する。なお、キャリア演習Ⅰ・キャリア演習Ⅱの授業は、健康スポーツコミュニケーション学科、生活医療福祉学科介護コース、生活医療福祉学科生活医療福祉・保育コース、臨床福祉心理学科の4クラスに分かれて実施された。また、全学科共通のテキストと

して、「自分のキャリアを自分で考えるためのワークブック（2005、小野寺博之著、日本能率協会マネジメントセンター）」⁷⁾を指定し、前述の取り組みのうち、主に自己理解に関わる授業回で使用した。

調査対象者

2012年度後期に開講された「キャリア演習Ⅱ」の最終授業回に、4クラスの学生（80名）を対象に質問紙調査を実施した。得られた回答数は75名（回収率93.8%）であった。

調査時期

2013年1月

調査内容

フェイスシートでは、性別、年齢、居住形態（自宅、学生寮、アパート等での1人暮らし）についてたずねた。

キャリア意識についてはキャリアレディネスを測定するための9項目を用いた。本調査で用いた9項目は森山（2007）⁴⁾による職業キャリアレディネス尺度27項目を参考に作成されている。項目内容には、キャリアに対す

表1 キャリア演習Ⅰ・Ⅱの取り組み内容の例

・自己紹介、他己紹介
・キャリアとは何か
・大学生生活の心得（学内施設の利用方法、大学での学び方、タイムマネジメント）
・レクリエーションやゲームをツールとしたグループワーク
・自己表現（論理的思考、3分間スピーチ）
・対人援助におけるコミュニケーション技術の基本
・自己理解（ライフライン分析、ライフロール、性格検査、キャリアアソシエーション）
・仕事理解（専門分野と進路との関連）
・就職情報へのアクセス（就職支援サイトへの登録、学内の就職課の利用方法）
・職業興味検査・職業適性検査
・1年間の学びの振り返り

表2 分析対象者の内訳

	男性	女性	無回答	計
健康スポーツコミュニケーション学科	21	5	1	27
生活医療福祉学科 生活医療福祉・保育コース	6	5	0	11
生活医療福祉学科 介護コース	12	9	0	21
臨床福祉心理学科	5	7	0	12
計	44	26	1	71

表3 キャリア意識に関する9項目の回答結果（全体 $N=71$ ）

領域	項目内容	第1回目 (授業開始時)	第2回目 (授業終了時)
		平均値（標準偏差）	
関 心 性	(1) 人生設計や生き方について、とても関心がある。	3.75 (0.79)	3.87 (0.84)
	(2) 今後の人生設計のための参考となる話には、耳を傾けるようにしている。	4.11 (0.69)	4.04 (0.84)
	(3) 自分は、何のために生きていくのか真剣に考えている。	3.54 (1.11)	3.56 (1.02)
自 立 性	(4) 自分の人生は、自分で切り開いていきたい。	4.24 (0.73)	4.15 (0.82)
	(5) これからの人生は、自分で責任を持って生きていきたい。	4.37 (0.87)	4.34 (0.88)
	(6) 人生を充実させるためには、何事にも積極的にチャレンジしていきたい。	4.06 (0.92)	4.13 (0.79)
計 画 性	(7) 自分は、将来どう生きていくのか具体的に計画を立てている。	3.44 (1.04)	3.49 (1.03)
	(8) どう生きていくか明確な目標を持っている。	3.56 (0.97)	3.46 (1.00)
	(9) 目標を達成するために、すでに取り組んでいることがある。	3.37 (0.99)	3.31 (0.87)

る「関心性（3項目）」「自立性（3項目）」「計画性（3項目）」の3領域が含まれている。各項目について、「非常に当てはまる（5点）」から「まったく当てはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。それぞれ得点が高いほど、関心性、自立性、計画性の意識が高いことを意味する。

3 結果と考察

分析対象者

調査協力が得られた75名のうち、キャリア意識の回答に不備がみられた者および調査1と調査2の両時点のデータが揃っていない者を除外し、最終的に71名を分析対象とした。各学科・コースの分析対象者の内訳を表2に示す。

分析対象者の平均年齢は18.90歳（ $SD =$

2.42）であった。居住形態については、自宅35名（49.3%）、学生寮21名（29.6%）、アパート等での1人暮らし12名（16.9%）、無回答3名（4.2%）であった。

キャリア意識

まず、対象者全体のキャリア意識の回答結果を表3に示す。

これをみると、キャリア意識の3つの領域のうち、自立性に関する項目が高い得点を示しており、中でも「これからの人生は、自分で責任を持って生きていきたい」に対する回答が最も得点が高かった。また関心性の項目である「今後の人生設計のための参考となる話には、耳を傾けるようにしている」「人生設計や生き方について、とても関心がある」の2項目は自立性の項目に次いで高い得点を示していた。これらの結果からは、自分自身

福祉系大学生のキャリア意識に関する調査研究（第2報）

表4 キャリア意識に関する9項目の回答結果（健康スポーツコミュニケーション学科） $N=27$

領域	項目内容	第1回目	第2回目	t値	p
		（授業開始時）	（授業終了時）		
関 心 性	(1) 人生設計や生き方について、とても関心がある。	4.07 (0.62)	4.04 (0.59)	0.27	
	(2) 今後の人生設計のための参考となる話には、耳を傾けるようにしている。	4.19 (0.68)	4.15 (0.77)	0.21	
	(3) 自分は、何のために生きていくのか真剣に考えている。	3.78 (0.89)	3.67 (0.83)	1.00	
自 立 性	(4) 自分の人生は、自分で切り開いていきたい。	4.30 (0.67)	4.41 (0.57)	1.36	
	(5) これからの人生は、自分で責任を持って生きていきたい。	4.63 (0.56)	4.63 (0.63)	0.00	
	(6) 人生を充実させるためには、何事にも積極的にチャレンジしていきたい。	4.33 (0.73)	4.30 (0.72)	0.33	
計 画 性	(7) 自分は、将来どう生きていくのか具体的に計画を立てている。	3.70 (0.95)	3.74 (0.94)	0.27	
	(8) どう生きていくか明確な目標を持っている。	3.63 (1.01)	3.63 (0.97)	0.00	
	(9) 目標を達成するために、すでに取り組んでいることがある。	3.41 (0.84)	3.41 (0.80)	0.00	

表5 キャリア意識に関する9項目の回答結果（生活医療福祉学科 生活医療福祉・保育コース） $N=11$

領域	項目内容	第1回目 （授業開始時）	第2回目 （授業終了時）	t値	p
		平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）		
関 心 性	(1) 人生設計や生き方について、とても関心がある。	3.18 (0.87)	3.55 (1.04)	1.30	
	(2) 今後の人生設計のための参考となる話には、耳を傾けるようにしている。	4.00 (0.77)	3.64 (1.03)	1.17	
	(3) 自分は、何のために生きていくのか真剣に考えている。	2.91 (0.70)	3.27 (1.27)	1.30	
自 立 性	(4) 自分の人生は、自分で切り開いていきたい。	4.18 (0.75)	4.00 (1.18)	0.52	
	(5) これからの人生は、自分で責任を持って生きていきたい。	3.73 (1.42)	3.82 (1.25)	0.43	
	(6) 人生を充実させるためには、何事にも積極的にチャレンジしていきたい。	3.82 (0.75)	3.73 (1.01)	0.43	
計 画 性	(7) 自分は、将来どう生きていくのか具体的に計画を立てている。	3.36 (0.67)	3.73 (0.90)	1.49	
	(8) どう生きていくか明確な目標を持っている。	3.55 (0.69)	3.64 (1.12)	0.27	
	(9) 目標を達成するために、すでに取り組んでいることがある。	3.27 (0.79)	3.45 (0.93)	1.00	

表6 キャリア意識に関する9項目の回答結果（生活医療福祉学科 介護コース） $N=21$

領域	項目内容	第1回目	第2回目	<i>t</i> 値	<i>p</i>		
		(授業開始時)	(授業終了時)				
		平均値	(標準偏差)				
関 心 性	(1) 人生設計や生き方について、とても関心がある。	3.43	(0.68)	3.81	(0.81)	2.02	<i>p</i> < .10
	(2) 今後の人生設計のための参考となる話には、耳を傾けるようにしている。	4.14	(0.73)	4.10	(0.77)	0.24	
	(3) 自分は、何のために生きていくのか真剣に考えている。	3.43	(1.40)	3.67	(1.02)	0.79	
自 立 性	(4) 自分の人生は、自分で切り開いていきたい。	4.24	(0.83)	3.90	(0.89)	1.92	
	(5) これからの人生は、自分で責任を持って生きていきたい。	4.38	(0.74)	4.10	(0.94)	1.30	
	(6) 人生を充実させるためには、何事にも積極的にチャレンジしていきたい。	3.81	(1.25)	4.14	(0.73)	1.23	
計 画 性	(7) 自分は、将来どう生きていくのか具体的に計画を立てている。	3.10	(1.30)	3.14	(0.96)	0.18	
	(8) どう生きていくか明確な目標を持っている。	3.43	(1.08)	3.10	(1.00)	1.38	
	(9) 目標を達成するために、すでに取り組んでいることがある。	3.38	(1.12)	3.19	(0.87)	0.62	

表7 キャリア意識に関する9項目の回答結果（臨床福祉心理学科） $N=12$

領域	項目内容	第1回目 （授業開始時）		第2回目 （授業終了時）		t値	p
		平均値	（標準偏差）	平均値	（標準偏差）		
関 心 性	(1) 人生設計や生き方について、とても関心がある。	4.25	0.62	3.92	1.16	1.00	
	(2) 今後の人生設計のための参考となる話には、耳を傾けるようにしている。	4.17	0.58	4.08	0.90	0.32	
	(3) 自分は、何のために生きていくのか真剣に考えている。	3.92	1.16	3.42	1.24	1.39	
自 立 性	(4) 自分の人生は、自分で切り開いていきたい。	4.25	0.75	4.17	0.72	1.00	
	(5) これからの人生は、自分で責任を持って生きていきたい。	4.67	0.49	4.58	0.51	0.43	
	(6) 人生を充実させるためには、何事にも積極的にチャレンジしていきたい。	4.25	0.75	4.08	0.79	0.80	
計 画 性	(7) 自分は、将来どう生きていくのか具体的に計画を立てている。	3.83	0.83	3.33	1.30	1.32	
	(8) どう生きていくか明確な目標を持っている。	3.75	0.97	3.58	0.90	0.52	
	(9) 目標を達成するために、すでに取り組んでいることがある。	3.42	1.16	3.17	1.03	0.64	

の生き方やキャリア形成に対して、意識の面では主体的・積極的な姿勢を持っていることが推察される。

このような自立性および関心性の2項目の得点の高さに対して、計画性については3つの領域の中では得点が低い傾向にあり、その中でも「目標を達成するためにすでに取り組んでいることがある」は、最も低い得点であった。加えて、関心性の中の1項目である「自分は何のために生きていくのか、真剣に考えている」についても、低い得点傾向を示していた。以上、全体の結果では、調査1（河西ら、2012）⁶⁾ とほぼ同様の傾向が示された。

次に、授業開始時と授業終了時でキャリア意識に違いがみられるかを検討するため、クラスごとに調査1と調査2のキャリア意識の各項目について、対応のある t 検定を行った。その結果、生活医療福祉学科介護コースにおいて関心性の中の1項目「人生設計や生き方について、とても関心がある」に有意傾向（ $p < .10$ ）がみられた以外、2時点でのキャリア意識に有意な差はみられなかった（表4から表7）。

このように、いずれの学科・コースにおいても、2時点でのキャリア意識にはほぼ違いがみられず、1年間のキャリア教育を経たこ

とによる意識変化がみられないという結果が得られた。これらの結果について、以下に考察を述べる。

まず、今回測定したキャリア意識の3つの領域のうち、主体性の項目に関しては、2時点ともに得点が高かったことから、対象者の学生は、入学時点からすでに高い主体性の意識をもち、その意識を高い状態で維持していたことが考えられる。「自分の行動に責任を持って生きていきたい」「自分の人生は自分で切り開いていきたい」といった意識は、青年期における「自立」のテーマを反映したものであると考えられ、高い得点傾向を示したことは理解できる。また、これらの意識については、個人のパーソナリティや生き方の志向が反映されていることも考えられ、個人の比較的安定した次元が回答に影響を与えていたために、1年間での変化が見られなかった可能性も考えられる。

それに対して計画性および関心性の一部の項目については、調査1の結果と同様に、低い得点傾向を示しており、これらの結果は森山（2007）⁴⁾ の結果とも一致するものであった。また、本研究の教育前後の2時点での比較においても意識変化は認められなかった。これらの結果について、その項目内容に着目

すると、まず「これから先の人生をいかに生きるか」「自分は何のために生きていくのか」といった問いについては、アイデンティティに関わる課題を意味しており、自らの生き方を確立していく途上にある者においては、これらの問いに対してまだ十分な答えを持っていないことが低い得点傾向に結びついたことが考えられる。つまり、大多数が青年期にある今回の対象者においては、自らのアイデンティティを模索している段階にあるために、「いかに／何のために生きるか」といった抽象的な問いに対しては比較的低い評定となったことが推察される。また、本研究の結果からは、目標達成に向けて具体的に計画を立てたり取り組んだりしているという意識も低いことが示された。これらを前述の自立性の意識の高さと併せて考えると、学生自身の意識として、責任をもって主体的に生きていきたいという自立に向けた願望は強く持っているものの、その意識を行動レベルで具体化できているという実感には十分に結びついていないことがうかがえる。このような傾向は入学時から見られることから（河西ら、2012）⁶⁾、大学1年間を通して学生が抱える課題であることが示唆された。

このように、学生自身の意識の面では志向と現実的な行動の間にギャップがあることがうかがえる一方、前述したように今回の対象者は、資格取得に向けたカリキュラムに沿って単位を取得することで客観的にはキャリア形成が進行していることが指摘される。それにも関わらず、学生自身の実感には必ずしも結びついていないことから、そこでは学生自身の学びに対する主体性や自己選択の意識が十分に発揮されていない可能性が考えられる。このような可能性をふまえ、キャリア教育においては、大学1年次からの学びが資格取得や将来の進路・職業選択に結びついていくこ

とを伝えることで、学生が自分自身の学びを振り返り積極的に意味づけていく機会を設ける必要があるのではないかと考えられる。大学4年間のキャリア意識の違いをとらえた五十嵐（2012）⁸⁾は、4年次の就職活動等の経験がキャリア意識に大きな変化をもたらすことを指摘しているが、それらに至るまでの将来像の模索や学習へのモチベーションの維持・向上という意味においては、初年次からのキャリア教育が学習の振り返りや統括の場として機能していくことが望ましいのではないかと考えられる。またこれらが、本研究で示されたような学生自身の意識の中での志向と行動とのギャップを埋めていくことにもつながるのではないかと考えられる。

最後に、今後の研究課題として、キャリア意識の変化についてその質的な側面を面接調査等の方法を用いてとらえていくことが挙げられる。同時に、授業での取り組みに関する感想・要望等の情報を得ることによって、学生の社会的・職業的自立に向かう意識をキャリア教育の中でいかに具体化していくのかについて、今後も検討していきたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省：平成23年度 大学等卒業者の就職状況調査。
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002a4ov.html>
- 2) 山本 嘉一郎：大学教育におけるキャリア教育とその実践について．京都光華女子大学研究紀要, 49, 77-90, 2011.
- 3) 文部科学省：今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について．
www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/001.htm
- 4) 森山廣美：大学におけるキャリア教育—

- その必要性と効果測定の視座から一. 四天王寺国際仏教大学紀要, 44, 309-319, 2007.
- 5) 森山廣美：大学におけるキャリア教育の検証（序章）. 四天王寺国際仏教大学紀要, 45, 579-590, 2008.
- 6) 河西正博・田仲由佳・吉森恵・梅谷進康・中山忠彦・和田典子：福祉系大学生のキャリア意識に関する調査研究（第1報）. 近畿医療福祉大学紀要, 13, 87-91, 2012.
- 7) 小野寺博之：自分のキャリアを自分で考えるためのワークブック, 日本能率協会マネジメントセンター, 2005.
- 8) 五十嵐敦：大学生のキャリア発達についての研究—1～4年までの各学年の横断データの比較から一. 福島大学総合教育研究センター紀要, 12, 27-34, 2012.